

* 編集特別幹事を拝命して早一年がたち、任期の半分となりましたが、いまだ編集の奥深さを実感できず力不足を反省しています。これまで編集委員の方々はじめ周りの皆様の御協力のもと、小特集記事などをまとめてまいりましたが読者の皆様の御期待にこたえられているでしょうか？

* 会誌編集という仕事に初めて携わってきて、論文誌の編集経験がない身ですが、同じ学会の刊行物である論文誌と比べた会誌編集の特徴を考えてみました。

* 論文誌は研究者の成果を対外的にアピールする貴重な媒体の一つであることから、内容の正確性や貴重性、重要性が求められます。すなわち学術分野の進展に貢献できる重要な論文を多数掲載することが論文誌としての使命です。このようにすることで、circulationが高まり更に多くの重要な論文が集まるというフィードバック効果も期待できます。

* 一方会誌はいわゆるマガジンなので、学会としての記事の重要性だけではなく、読者への訴求力（つかみ）も求められるポイントの一つであると思っています。そういう意味でタイトルやキャッチフレーズも、記事内容そのものと同じくらい重要な編集対象です。

* 本会のように、読者層の専門範囲が広く、会員数が3万人にも達する大きな学会では、その多様な読者の方々の興味をつかんで読んで頂くようにすることが編集記事を選択する際に困難な点です。学会内の各ソサイエティ間の調整はもとより、関連する他学会との差別化も考慮しなくてははいけません。とりわけ特集・小特集などのテーマ選定は、その中でも一番力が入るところです。

* こうした一般記事や特集テーマの選定の難しいところの一つは、編集企画段階が記事掲載の大体一年前くらいであり、掲載時期を考慮して注目度の高い面白い記事構成にする

という点です。こうした取組みは、通常の出版サイクルの早い雑誌との大きな違いであり、迅速性のある程度犠牲にして、読者の興味を先取りしつつ内容を充実させるという工夫が編集のポイントになっています。

* 将来の注目度を先読みした記事選定は、研究行為そのものに通じるところがあるのかもしれませんが。研究は程度の差こそあれ、テーマ選定から実用化に至るまでの期間が長く、実用時期に陳腐化していないか、他の技術に代わられていないか、ということを経験時に先読みしていくことが重要です。記事選定にも同様な取組みが求められていると思っています。掲載時期に内容が陳腐化していないか、他の記事と重複していないか、早過ぎて内容充実には尚早ではないか、遅過ぎてアピール時期を逸していないか、などを考慮する必要があります。このような将来を見据えた企画が、記事掲載時期にタイムリーなものとなったときに編集者冥利に尽きる瞬間です。まだ1年の編集経験ですので、自分の企画した記事が掲載された経験が少なく、その醍醐味はまだ味わっていませんが…。

* また読者の皆様に興味を持って頂くことの一番は、何より誌面を作る我々編集委員自らが興味を持ち、わくわく感を感じることでないでしょうか？ その気持ちが少しでも伝わるように、長い編集期間があることを逆に利用している検討していくことも大事だと感じています。

* 本会の対象分野であるICTは日進月歩の技術なので、特に発想力が豊かで好奇心旺盛な学生や若い研究者という読者層にどれだけアピールできるかが、会誌の活性化に欠かさないポイントです。若い方々の斬新な発想力を引き出すための誌面作りには、編集する立場でも精神的な若さが必要だと感じているところです。ぜひ忌憚ない御意見を頂ければ、と思います。

（編集特別幹事 笹山浩二）